

〈目的〉 衣服の着脱は基本的な生活習慣の一つである。特に着衣動作を行う時、着やすい、着にくいなどを感じることがあり、動作と着衣感には何らかの関連性があると思われる。着衣動作は衣服の形態や着方などによって変化し、着衣感も影響を受けていると考えられる。本報では着衣の過程に着目し、各種衣服を用いて衣服形態の違いによる着衣動作の特性について考察し、さらに着衣感との関連についても検討を試みた。

〈方法〉 被験者は健康な女子学生17名とした。パンティストッキング有・無の状態での衣服形態4種（タイトT・フレアーF・デニムDのスカート、ジーンズJ）計8タイプについて着衣動作を行わせた。動作測定は、筋電計による上肢の表面筋活動の測定及びビデオ撮影による動作過程の観察で行った。同時に着衣感についてSD法11項目による官能評価を行った。動作過程を主動作、補助動作に分けて計時し筋電図との経時変化をとらえた。官能評価は各項目の平均評点を求め、衣服4タイプのプロフィールをもとに検討した。

〈結果〉 1)着衣所要時間は、主動作ではTとF間に有意差が認められずT, F < D < Jの順であった。補助動作では、衣服タイプに有意差が認められなかった。2)上肢の筋活動はパンティストッキングの有・無に関わらずT, F < D < Jの順に活動量が大きくなった。3)官能評価において、平均評点のプロフィールはTとF, DとJが類似傾向を示し、全体評価“着やすいー着にくい”では4タイプ間に有意差が認められた。4)着にくい側に位置し評点が高い衣服のタイプほど上肢の筋活動が増大する傾向が認められるが、今回の実験ではT, Fにおける動作特性と着衣感との間にはズレが見られた。